

■今月の特選句

2016年12月

任せると云つて口出す松手入れ

金澤 健

見てられない性分なんですね。子どもの教育も胎教から始めないと。良い音楽を聴き良い文学に接し、それに…。じゃあ、あんた自分で産みなよ。

どんぐりや甲乙丙丁みな仏

田村米生

「どんぐり」達は、幼馴染。甲乙丙丁は秀才も餓鬼大将もということか。みんなホトケになっちゃった。無常観をからりと表現した。

ご同役には掃かれじと濡れ落葉

都吐夢

濡れ落葉の分際でいつまで地べたにしがみついているのじゃ。何を言うか、箒を手にしている貴殿とて同じ濡れ落葉。決して掃かれまいぞ。

密会のための胡桃の部屋リース

小林英昭

胡桃のいくつもの個室がレンタルで使えるとは知らなんだ。交わされる濃密な会話は、蜜の味。しかし、ダイエットせねば入室出来んなあ。

貧乏神は半額でよし神の旅

高橋きのこ

旅費を値切るなんて、何となく落語的でおかしい。石原さんや、舛添さんみたいなセレブ旅行の神について行けばいい。無料にしてくれるかもね。

鉄砲という悲しみに熊を狩る

八塚一青

人間の生活圏に現れては熊や猪が殺される。危害があつてはならないので致し方ないのだが哀れを感じる。鉄砲は怒りではなく悲しみに使われた。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

- | | |
|---|-------|
| ドローンを監視するドローン秋高し
・・・季語のプラスを監視で裏切り | 秋月裕子 |
| 大賞を貶して通る菊花展
・・・評価基準を曲げる情実 | 井口夏子 |
| 婿殿に秋茄子食はすべきや否や
・・・入り婿はホレ嫁も同然 | 小川鈍太 |
| 立冬が肩怒らせてやつて来た
・・・秋が未練に去りたるあとに | 稲葉純子 |
| 瞑想台風三日三晩も坐り込み
・・・気象予報士衣装に困る | 伊藤浩睦 |
| 栗弁も知事も飛びます羽田行
・・・知事はほくほく栗弁が好き | 久我正明 |
| お腹いつぱいでも柿だけは入る
・・・渋抜き前の柿にしてみろ | 赤瀬川至安 |
| 根性の枯葉一枚木にすぎる
・・・その木は多分男前だな | 梅岡菊子 |

膝元に姫を待らし歌留多とり
・・・歌に詠まれし愛を体感

柳 紅生

凧や階段で止む発車ベル
・・・苦笑いして照れ笑いして

加川すすむ

大根を抜いて大地を緩ましむ
・・・駅前ならば陥没事故に

下嶋四万歩

幾何の苦勞思い出させるおでん鍋
・・・いつまで経っても学生気分

花岡直樹

グリルてふ焼場に秋刀魚葬れり
・・・粉山椒で焼香するや

新島里子

■今月の滑稽句

	敬老日加齢病の顔揃う 出雲より呼び出しメール神の留守	青木輝子 青木輝子 青木輝子
【佳作】	煤払いしっぺ返しの煤を浴び	
【佳作】	ひさびさに頂戴したり草虱 田が野へとふえていやます草紅葉 山山の展びて襖や秋信濃	青山桂一 青山桂一 青山桂一
【佳作】	冷まじや御器夫蝸叩く新聞紙 豚汁のとんの少なき牛井屋	赤瀬川至安 赤瀬川至安
【佳作】	敵の敵は味方なりき鬼やんま 海山を眺めて鳴けり秋鳥	秋月裕子 秋月裕子
	月光の半分もらう格子窓	有富洋二
【佳作】	空耳か囊虫の声聞きたるは 鳥わたり鳥獣戯画の展覧会	有富洋二 有富洋二
	踏みしだき口を割らした毬栗よ	井口夏子
【佳作】	連なるはしゃしやら孫まで落花生	井口夏子
	どゆことよなでしこのくにぎやることば	池田亮二
【佳作】	割れ鍋米寿とじ蓋傘寿日向ぼこ	池田亮二
【佳作】	良い台風雨も降らさず風吹かず 村田銃今も現役猪を撃つ	伊藤浩睦 伊藤浩睦
【佳作】	ボブ・ディラン受賞を無視し頬かむり もしかして御用納めの特選句 天引きめ年金細る年の暮れ	伊藤洋二 伊藤洋二 伊藤洋二
	渡り鳥すこし遅るる鳥の声	稲沢進一
【佳作】	どつぷりと染まる人間紅葉狩 遠回りしたる楽しさ大花野	稲沢進一 稲沢進一

- | | |
|-----------------------|-------|
| 幾つもの穴知りながら穴まどひ | 稲葉純子 |
| 【佳作】 神の留守無断欠勤してしまふ | 稲葉純子 |
| 離婚して独身謳歌帰り咲 | 井野ひろみ |
| 登山者も乗るエレベーター駅ホーム | 井野ひろみ |
| 爆ず柘榴名の如種はガーネット | 井野ひろみ |
| ありがとを背中で聞いているサンタさん | 上山美穂 |
| 柚子の香はアロマテラピー椀の中 | 上山美穂 |
| 【佳作】 とびこみの姿勢で蜘蛛の囲をくぐる | 上山美穂 |
| 【佳作】 櫓止めて煙突探すサンタかな | 氏家頼一 |
| 年の瀬や去年の爆買中国語 | 氏家頼一 |
| 雉鳩のクルルクルルと年の暮 | 氏家頼一 |
| 長き夜を使い果たすや長電話 | 梅岡菊子 |
| 【佳作】 秋の蝶どこへ行くのか風つなぐ | 梅岡菊子 |
| 【佳作】 ぼつくりの死が羨まれる鳳仙花 | 越前春生 |
| 最初の恋最後の恋も花野かな | 越前春生 |
| 生き死には誰も分らず神の留守 | 越前春生 |
| 木枯や今年の恥の搔き納め | 岡野 満 |
| コンビニのおでんに頼る共稼ぎ | 岡野 満 |
| 【佳作】 巫女たちが欠伸している神の留守 | 岡野 満 |
| 【佳作】 長き夜のテレビ換えても見る物なし | 小川鈍太 |
| しみじみと蚯蚓鳴かせる拙句かな | 小川鈍太 |
| 【佳作】 真つ二つ切られし大根首かしげ | 奥脇弘久 |
| 柿ひとつ奈良産とあり苦吟する | 奥脇弘久 |
| 文化の日なぜこの日かと孫尋ね | 奥脇弘久 |
| 混浴は足湯までです木の実落つ | 加川すすむ |
| 【佳作】 小春日や実は二人で一万歩 | 加川すすむ |

	仏のころここにはあらず菊日和	金澤 健
【佳作】	サイケ調山粧うて落ち着かず	金澤 健
	水引の花ほどの笑み児にもらふ 後の月子ばなれ出来ぬ母であり	川島智子 川島智子 川島智子
【佳作】	蕉翁に季なし落馬の句のありぬ	
【佳作】	裸木の股間に乗りて枝を打つ そんな嘘出直してきて後の月	久我正明 久我正明
【佳作】	席卷の泡立草やボブ・ディラン お日様に焦がれしあとの酔芙蓉 満月を練りながら来る太鼓台	工藤泰子 工藤泰子 工藤泰子
	枕絵の性はおほらか秋灯し	小林英昭
【佳作】	豊の秋乳房は嬰がすんでから	小林英昭
	着膨れて車に当たる占ひ師	下嶋四万歩
【佳作】	漲りし嘘のあとはやる気失せ	下嶋四万歩
【佳作】	食べ頃と妻体形のラ・フランス 固唾呑む講師は美形文化の日 稲を刈る時どき腰をイナバウアー	壽命秀次 壽命秀次 壽命秀次
	又しても顔空侵犯翳雲 満席の優先席や身にしみて	白井道義 白井道義 白井道義
【佳作】	聞き流す妻の手解き秋刀魚焼く	
【佳作】	案山子立つ大根役者の勢揃い 芭蕉忌や旅の続きの夢を見る	鈴鹿洋子 鈴鹿洋子
	転げたばかりの団栗に生き方教わる	鈴木和枝
【佳作】	友達にもなれないがポケットにドングリ 笑われてもいい何かになる団栗	鈴木和枝 鈴木和枝

	薄ぐもりカーディガン着て老婆外 秋立つや洗たくものを外に干し	鈴木哲也 鈴木哲也
【佳作】	身に入むやうがい手洗い風邪予防	鈴木哲也
【佳作】	目貼りして情報今日も聞き逃し 日向ぼこ愚痴の出そうな婆といて 人は皆野生にもどり牡丹鍋	高田敏男 高田敏男 高田敏男
	俳人になれず廃人暮の秋	高橋きのこ
【佳作】	冬ごもり大もり小もりのカップ麺	高橋きのこ
【佳作】	大根煮味は忍びの術つかひ 秋晴の祝いの酒に頬染めて パンの耳袖ねりの瓶にダイビング	高橋ユミ子 高橋ユミ子 高橋ユミ子
	晩秋や飛鳥の里に誘はるる 秋の霜キトラ古墳を巡りたる	田中 勇 田中 勇
【佳作】	行く秋の石舞台を立ち入りけり	田中 勇
	秋高しごそごそ探す消化剤	田中早苗
【佳作】	恍惚の蟻螂末路は知らざりき 鴟一声身のびりびりと引き締まる	田中早苗 田中早苗
【佳作】	救命具付けし案山子の天睨む 布袋さん弁天さんのやうな桃	田村米生 田村米生
	人の世は回り舞台よ年暮るる 紅葉で日本列島燃えたぎる	津田このみ 津田このみ
【佳作】	餅喉に詰まらせるなよ我が夫よ	津田このみ
	闇汁や無礼講にある落とし穴	都吐夢
【佳作】	鰐食えて蝗食えぬと言う不思議	都吐夢
	写し絵の父に献盃今年酒	飛田正勝

- | | |
|--|-------------------------|
| 【佳作】 徘徊でなく放浪や敬老日
神の留守医者へ行く妻行かぬ夫 | 飛田正勝
飛田正勝 |
| 【佳作】 生ブーツ音がしますぞつけまつ毛
一人寝に風の小言の夜寒かな
稲妻の音が近づきなんまいだ | 中井 勇
中井 勇
中井 勇 |
| 【佳作】 どんぐりか獣の糞か傘の先
黄葉してまるで茶髪の公孫樹 | 新島里子
新島里子 |
| 【佳作】 倒立をして立冬の眺めかな
五七五に詠み損ねたる七五三
呼んだ覚えないうざ勝手に十二月 | 西をさむ
西をさむ
西をさむ |
| 【佳作】 秋うららスキんシップに妻ピシャリ
お土産の地ビール当地の秋運ぶ | 花岡直樹
花岡直樹 |
| 晩年の秀吉言はば木守柿
【佳作】 蛇穴へ胃カメラは胃へ惑ひなく
新走みつちり医者に諭さるる | 原田 曄
原田 曄
原田 曄 |
| 【佳作】 駐車禁止覆面バトカー日向ぼこ
竹婦人我が家の猫のお気に入り
鰻屋の行列鰻伸び縮み | ひがし愛
ひがし愛
ひがし愛 |
| 【佳作】 存分に破かせてやり障子貼る
弁財天誘ひて神の旅立ちぬ
運動会空をまあるくしてみたり | 久松久子
久松久子
久松久子 |
| 【佳作】 ごぼうびのやうな一日小春の日
冬近し嫌いなはずの演歌聴き
髭剃りの後の気分の刈田かな | 日根野聖子
日根野聖子
日根野聖子 |
| 千の風浴びてぼつねん秋彼岸 | 廣田弘子 |

- | | | |
|------|---|-------------------------|
| 【佳作】 | 秋深し読んでもらへぬ積読本
書棚には英傑あまた読書の秋 | 廣田弘子
廣田弘子 |
| 【佳作】 | 山小屋に寝袋夜長山の霊
敬老日泥鰌掬ひの鼻の銭
媪面神楽終へ脱る若き面 | 藤岡蒼樹
藤岡蒼樹
藤岡蒼樹 |
| 【佳作】 | 隣まで柿食ふ客となりに行く
そぞろ寒胃の腑のぞきに来るカメラ
吊してもいちめじやないよ吊し柿 | 藤森荘吉
藤森荘吉
藤森荘吉 |
| 【佳作】 | 拝殿へこぼれ萩踏むなと廻り道
芝の葉や朝露三粒光らせる
寂聴の定命をきく秋の夜 | 藤原セツ子
藤原セツ子
藤原セツ子 |
| 【佳作】 | 三日月と酌み交す夜の静けさよ
北風の泣く声響く静寂かな
松茸や高値の華はどんな味 | 細川岩男
細川岩男
細川岩男 |
| 【佳作】 | 神の留守狛犬子らの御座となり
大銀杏日がな一日蝶降らせ
ハモニカを初めて吹いた赤とんぼ | 本門明男
本門明男
本門明男 |
| 【佳作】 | 金木屋今年も季節忘れずに
柿を食ふ柿は医者いらずと言はれ
植物の命は強し返り花 | 松井寿子
松井寿子
松井寿子 |
| 【佳作】 | マスクして女物干す爺の逃げ腰
仏像に怒りをあらは枯蟪蛄
そこかしこ虫食いの禿山眠る | 松井まさし
松井まさし
松井まさし |
| 【佳作】 | よく笑う娘に連れられて冬の旅
眠るにも食うにもちからキリギリス
ふところに入れても財布寒いまま | 南とんぼ
南とんぼ
南とんぼ |

	新米や魔法のごとく蓋を取る	百千草
【佳作】	小春日や波長のずれし夫とみて わが余生豊かに芋の煮ころがし	百千草 百千草
	テーブルにおでん前線串の雨 三万の値に死んだふりする秋刀魚	森岡香代子 森岡香代子
【佳作】	凧は無精髭に八つ当たり	森岡香代子
【佳作】	風呂吹を愛して舌を焦がさる 不機嫌な顔して達磨忌の達磨 新蕎麦の張り紙古びはじめたる	八木 健 八木 健 八木 健
【佳作】	昭和史に「暮しの手帖」年用意 鍋奉行能書き長き親子月 寝もやらず昨日のままの年守る	八洲忙閑 八洲忙閑 八洲忙閑
【佳作】	必ずはないよ賞与のようなもの 狼は孤独が過ぎて姿消す	八塚一青 八塚一青
【佳作】	お仕置きの膝笑ひをる寒稽古 大マスク語る目元は熱っぽく	柳 紅生 柳 紅生
	ハルキスト秋の季語には高き壁	柳村光寛
【佳作】	しぐるるや寝たふりをする六六魚 球根を買ひ足しに行く冬支度	柳村光寛 柳村光寛 柳村光寛
	草踏みて手応えのありバツタ肥ゆ 鈴虫の孤独を知りて鳴く夜かな	山下正純 山下正純
【佳作】	芋虫の糞を集めし堆肥かな	山下正純
	湯船に浮かび勿体無いの酢橘かな	山本けい子
【佳作】	ことごとくビルを解体秋高し いつまでや川に晒され銀杏の実	山本けい子 山本けい子 山本けい子
【佳作】	キヤベツの解体餃子にカツレツに 傷だらけなり珍品の秋なすび ふうふうや足袋の小鉤(はぜ)がかかからない	山本 賜 山本 賜 山本 賜
【佳作】	トランプを切り損ねてはクリントン 五輪会場道のり陰し鎌鼬 毒舌の舌禍となりて冷まじき	横山喜三郎 横山喜三郎 横山喜三郎

豆に歯の合はぬ齢や枯木宿
頬かむりご免なんしよ急ぎます
【佳作】 大風呂敷たたみ損ねて年わすれ

吉原瑞雲
吉原瑞雲
吉原瑞雲